

田中：ネイサン・M・ロスチャイルドに関する一考察

# ネイサン・M・ロスチャイルドに関する一考察

田 中 文 憲\*

A Study on Nathan M. Rothschild

Fuminori TANAKA

## 要 旨

本稿の目的は、ユダヤ人であるネイサン・M・ロスチャイルドがなぜイギリスのロンドンで活躍し、世界一の金融業者になりえたかについて究明することである。

分析の結果、ネイサンが渡った頃のイギリスは、すでに商業や金融の中心であり、しかもイギリスは大陸に比べユダヤ人に対してより寛容であったことがわかった。

豊かな商才を持ったネイサンはマンチェスターの繊維商を振り出しに、その後ロンドンに移ってマーチャント・バンカーとして成功し、巨万の富を築き上げた。ネイサンの成功の要因は、まず第1に、類い稀な商才に恵まれていたこと。第2に、強いリーダーシップで兄弟をまとめ戦略的に動かしたこと。第3に、キー・パーソンに食い込み、人間関係を作りそれを繋げて情報網を構築できたこと。第4に、爵位には恬淡とし、つねにビジネス・ファーストを貫いたことである。

キーワード：ナポレオン戦争、為替手形、マーチャント・バンカー、情報網、リーダーシップ

## I はじめに

近年有力になった J.P. ケインと A.G. ホプキンズや W.D. ルービンステインの議論にしたがえば、18 世紀末から 19 世紀にかけてのイギリスの大発展を主に支えたのは、ロンドンのシティを中心とする商業や金融などのサービス業であった。<sup>1)</sup> とくに、国際金融の分野では、ロンドン是世界一の地位を獲得した。ウォルター・バジョットの『ロンバート街』には 19 世紀後半の世界の主要都市の銀行預金量が示されているが、それによれば、ロンドン（1872 年 12 月 31 日）1 億 2000 万ポンド、パリ（1873 年 2 月 27 日）1300 万ポンド、ニューヨーク（1873 年 2 月）4000 万ポンド、ドイツ帝国（1873 年 1 月 31 日）800 万ポンドとなっており、ロンドンが他を圧倒していることがわかる。<sup>2)</sup> この状況は、その後アメリカの急激な台頭で脅かされたかに見えるが、ロンドンは、今日でも未だその地位にとどまり続けている。

本稿では、ロンドンを世界一の金融都市にした立役者の一人といわれるネイサン・M・ロスチャイルドを取り上げ、ユダヤ人である彼がなぜイギリスの地で成功を収めることができたのか究

2019 年 9 月 3 日受理 \*奈良大学名誉教授

明を試みた。

## II イギリスにおけるユダヤ人の歴史

### 1. 最初の定住からユダヤ人追放令まで

ユダヤ人がイギリスに住み始めたのは 1066 年のウィリアムによるノルマン征服以降である。ウィリアムの故地であるローアン (Rhoan) (現在のフランスのルーアン (Rouen)) に住んでいたユダヤ人がウィリアムに付き従ってイギリスに渡ったのが最初である。その後、ユダヤ人はロンドンを中心に少しずつ数を増やしていったが、ヘンリー 1 世の時代には一応居住の自由は保証されていた。したがって、それ以降もイギリスには大陸のような「ゲットー」は存在しなかった。しかし、ユダヤ人差別は厳然と存在した。そのため、彼らは土地の所有が認められず「ギルド」への加入も認められなかった。その結果、農業および商工業を営むことができなかった。またキリスト教徒は、「教会法」によって利子を取ることを禁止されていたが、一方ユダヤ人は、キリスト教徒などから利子を取ることを許されていた。<sup>3)</sup> その根拠は旧約聖書の「申命記」第 23 章 20～21 の「同胞には利子を付けて貸してはならない。・・・外国人には利子を付けて貸してもよいが、同胞には利子を付けて貸してはならない」<sup>4)</sup> や「出エジプト記」第 22 章 24 の「もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、彼に対して高利貸しのようにしてはならない。彼から利子を取ってはならない」<sup>5)</sup> さらに、「レビ記」第 25 章 35～37 の「もし同胞が貧しく、自分で生計を立てることができないときは、・・・あなたはそこから利子も利息も取ってはならない」<sup>6)</sup> などである。<sup>7)</sup> こうしたことが原因でその後もユダヤ人はさまざまな嫌疑をかけられて迫害されたが、1189 年 9 月から 90 年 3 月にかけてイギリス全土で反ユダヤ人暴動が起きた。中でもひどかったのが、1190 年のヨークでのユダヤ人襲撃事件である。<sup>8)</sup>

ジョン王 (1199 年即位) とヘンリー 3 世 (1216 年即位) の時代になると、フランスに持っていた広大な土地が奪われ、これを取り戻そうとして何回も遠征が繰り返された。ジョン王は、多額の遠征費を賄うため国内に重税を課したが、諸侯が猛反発したため、一番従順なユダヤ人に法外な税金をかけた。それまでもユダヤ人には相続上納金や財産没収、冥加金などの税金がかけられていたが、特にひどかったのが「恣意税」である。1210 年の「ブリストル恣意税」はその過酷さで知られている。<sup>9)</sup> 中世期のユダヤ人に決定的な影響を与えたのが、1215 年の第 4 ラテラノ公会議 (Lateran Council) で採択された反ユダヤ的諸規定である。これらの規定は全規定 70 条のうち最後の 67～70 条にある。この中でもユダヤ人蔑視を組織化し、否定的イメージを確立する上で大きな影響力を持ったのが「ユダヤ人徽章の着用義務化」と「すべての公職あるいは類似の権威の外観を与える地位から、ユダヤ人を排除すること」であった。これらが、ユダヤ人を視覚的に識別させ、キリスト教徒との社会的接触を阻止し、差別させ、社会的に排除しようとする原動力となっていた。<sup>10)</sup> この規定を受けて、イギリス国王政府は、1218 年、13 歳以上のユダヤ人男性に、白いリネンあるいは羊皮紙製の徽章を胸に付けることを命じた。<sup>11)</sup>

ヘンリー 3 世は、有力なユダヤ金融業者が過酷な税金によってほとんど破産すると、方向を転換し、1233 年には「ユダヤ人に関する制定法」を発表して、ユダヤ人の貸し付けに 43.3% の上

限利率を設定し、同時に国王に利益を与えないユダヤ人の追放を命じた。<sup>12)</sup> これを受けて、各地でユダヤ人排斥の動きが生じた。その代表例が、1235年にニューカッスル・アポン・タインの市民が100マルクの贈与で国王からユダヤ人追放の特許状を得たことである。こうした特許状は、その後サザンプトンやバーカムステッド、ダービーなどへと波及していった。<sup>13)</sup> 次のエドワード1世（在位1272年～1307年）はユダヤ人排除に向かって一気に突き進んだ。1275年には、「ユダヤ人制定法」(Statutum de Judaismo / The Jewish Statute)を発布して、ユダヤ人に対していかなる形式によらず高利貸し(usury)を禁止した。また7歳以上の男子には縦4½インチ横2¼インチの黄色の布を衣服の上部に付けることを義務づけた。<sup>14)</sup> そして、エドワード1世は1290年7月18日ついにユダヤ人をイギリスから追放する命令を発した。中世ヨーロッパ諸国の中で、史上初の一国規模の永久追放という未曾有の措置をなぜ彼が下したのかという疑問に、佐藤唯行は、「追放を生み出した根本原因とは、何よりも大諸侯による土地集積を促進するユダヤ人金融の潜在的機能が、エドワード1世がめざした中央集権的な封建王政の基盤そのものを根底から切り崩す作用を及ぼしていたこと、そしてその作用を阻止しようとした彼の改革が失敗に帰した」からであろうとしている。さらに佐藤は、この頃「羊毛生産の国民的基幹産業化を告げる最初の特別羊毛輸出税が賦課され、これが国王政府の新たな税収源となった」こと、また「徴税基盤を王国全体に拡大し、都市への十分の一税や農村への十五分の一税に代表される国民各階層に賦課される一般直接税」などが、「国王財政のユダヤ人に対する依存度を大幅に弱める」ことになったことが、ユダヤ人の存在理由を希薄化させ、これが追放につながったのではないかと結論づけている。<sup>15)</sup>

## 2. 隠れユダヤ教徒（マラーノ＝marrano）の時代（1290年～1656年）

1290年の追放令は改宗したユダヤ人（コンベルソ＝converso）（つまり隠れユダヤ教徒）には適用されなかった。チューダー王朝（1485年～1603年）時代には、隠れユダヤ人は国王政府によって、むしろ積極的に活用された。<sup>16)</sup> その最大の要因をつくり出したものが、1534年のヘンリー8世による「国王至上法」(Act of Supremacy)の制定である。これによってイギリスはローマ教会から離れ（実際には破門された）プロテスタントになったが、ローマ教会およびカトリック国なかでも強国スペインから侵攻を受けるのではないかという不安があった。このため、ヘンリー8世は「セファルディ」(Sephardi)と呼ばれるポルトガル系とスペイン系の隠れユダヤ人を保護し活用した。とくに外国貿易に従事したり、医師が多かったポルトガル系の隠れユダヤ人をスペインの動向をさぐるために利用したとされる。<sup>17)</sup> ヘンリー8世の娘であるエリザベス女王は、1559年「国王至上法」を再制定し、カトリック勢力の攻撃に備えた。その最大の困難が1588年フェリペ2世によって差し向けられた「スペイン無敵艦隊」(Invincible Armada)の来襲である。この時エリザベス女王の懐刀であり諜報組織を束ねる国務大臣ウォルシinghamはロンドン在中の医師エクトール・ヌネスなどの情報網を通じて、スペインのイギリス侵攻の情報をつかんだことから、十分な迎撃体制がとれたのである。<sup>18)</sup>

ジェームズ1世（在位1603年～25年）の治世下では、1609年に、隠れユダヤ人同士の内紛が原因となって、ポルトガル系の隠れユダヤ教徒に国外追放令が出されたが、実際には、多くの

ユダヤ人がイギリスにとどまったようである。<sup>19)</sup> もとはと言えば、ローマ教会からの離脱後、カトリック勢力の侵攻から国を守るために隠れユダヤ人を利用したヘンリー 8 世やエリザベス女王は、長谷川如是閑のいうイギリス的な「実益主義」(utilitarianism) の実践者であったと言えよう。<sup>20)</sup> つまり 17 世紀初頭(エリザベス女王の最晩年)には、国の上層部、すなわち司法、行政、外交レベルでは、ユダヤ人の再入国を許すべきとの方向性が出されていたのである。<sup>21)</sup> しかし、一般大衆レベルでは、依然としてユダヤ人に対する嫌悪感は強く残っていたことも事実である。その証拠がクリストファー・マーロウの『マルタ島のユダヤ人』やシェークスピアの『ヴェニスの商人』などの反ユダヤ主義的な演劇が庶民に受けたことに現れている。<sup>22)</sup>

### 3. ユダヤ人の再受け入れ

17 世紀前半になると、当時イギリスでもっとも革新的なキリスト教徒であったピューリタン(清教徒)が実権を握った。彼らはヨハネ黙示録第 20 章に記された「千国王国」の到来を信じ、彼らの計算ではその到来時期は 1656 年とされ、それまでにユダヤ人のディアスポラ(Diaspora = 国外離散)の成就と彼らの集団改宗が必要だとした。こうして、1653 年、ユダヤ人の受け入れに熱心なピューリタンたちのリーダーであるクロムウェルが護国卿に就任して独裁政権(共和制)が成立した。世に言う「ピューリタン革命」である。<sup>23)</sup>

一方でクロムウェルは 1651 年「航海法」を發布して国際貿易からのオランダの締め出しを図ったため、アムステルダム的有力ユダヤ商人たちはロンドンに移住することを希望した。そこで、1655 年アムステルダムのユダヤ指導者メナセ・ベン・イスラエルがクロムウェルにユダヤ人の入国を認めるよう説得した。これを受けて、1656 年クロムウェル政府は、ユダヤ人の再入国を認めたのである。<sup>24)</sup> クロムウェルがユダヤ人の再入国を認めた理由は主に 2 つである。まず第 1 は、クロムウェル革命政権は財政難であり、アムステルダムの有力商人団を従順な財源にしようとしたこと。第 2 に、クロムウェルは「西方計画」と称する帝国主義的手法で落ち目のスペインが持つカリブ海の植民地を奪うことを目論み、この目的の成就のために、スペインおよびスペイン植民地の事情に通じたスペイン、ポルトガル系ユダヤ人(セファルディ)を活用しようとしたからである。<sup>25)</sup>

1685 年にジェームズ 2 世が即位すると、カトリック信仰を押しつけるようになり、その圧政に苦しむ諸勢力の要請を受け、1688 年オランダ総督オラニエ公ウィレムは、大軍を率いてイギリスに上陸し、ウィリアム 3 世となった。<sup>26)</sup> ウィリアム 3 世もまたセファルディを厚遇した。その理由は、ウィレムのイギリス上陸のための軍資金 200 万ギルダーを用立てしたり、ジェームズ 2 世を正統とする「ジャコバイト」の反乱を鎮圧するための資金を用意したのがアムステルダムの大物金融業者ソロモン・メディナを含む有力ユダヤ商人たちであり、彼らを取り込む必要があったからである。実際に、ソロモン・メディナはウィレムに従ってロンドンに移住している。この結果、ロンドン市は、ユダヤ人の力を無視できなくなり、1697 年に在イギリス外国人の中で、ユダヤ人のみシティの自由市民権を取得せずに王立商品取引所の公認仲買人になれることを正式に承認した。<sup>27)</sup>

佐藤唯行は、「17 世紀の英国には、ゲットー制度は存在せず、ユダヤ人は他の英国人と平等な

法の保護のもとに置かれ、信教、居住、移動の自由を有していた。彼等は若干の法的無資格（公職就任権とシテイの自由市民権の取得等）を除けば、実質的な社会的平等を享受していた」、さらに「英国内の他の宗教的少数派集団と比較した場合でも、ユダヤ人が被った法的無資格状態は、実質的にプロテスタントの非国教徒とほぼ同等の水準、或いはカトリック教徒よりもやや良好な水準にあった。むしろ時期によっては、ユダヤ人は後二者よりも良好な宗教的権利さえ享受していた。たとえばチャールズ二世時代には、ユダヤ人はプロテスタントの非国教徒カトリック教徒と異なり、自らの会堂で礼拝・集会を催す権利を有し、ラビは許可状を取得せずに、そこで説教を行うことができたのである。またさらに重要なことは、英国ユダヤ人が被った法的無資格状態は、特にユダヤ人を狙って設定されたものではなく、ほとんど常に、非国教徒やカトリック教徒を排斥するために企図された法的制限の結果に過ぎなかったのである」と主張する。<sup>28)</sup> 佐藤は、さらに「もちろん近代英国でも、ある程度の反ユダヤ主義が存在したことは事実である。しかし、それは、ヨーロッパ大陸の多くの国で発生した政府主導型の法的措置に基づいた反ユダヤ主義ではなく、私的生活領域における反ユダヤ主義であった」し、「この日常生活面での敵意も大陸諸国の水準と比べれば、かなり微弱なものであった」と言う。<sup>29)</sup>

たしかに、18世紀中葉以降、セファルディの中には外国貿易や国債の引き受け、株式の仲買などで財産を築く者が現れたが、地主貴族層の開放的性格が顕著な近代イギリスでは、カントリ・ハウス付きの所領や家紋は、金銭で購入することが可能であり、富裕なユダヤ人がジェントルマン身分に比較的容易に参入することができたのである。<sup>30)</sup> なるほど18世紀の地主貴族層が、富裕ユダヤ人に対して示した開放性、寛容さは、同時代のアンシャン・レژیーム体制下の大陸諸国と比べきわめて異例ではあったが、当時のイギリス人支配層は、心の奥底ではユダヤ人を本質的に異質な存在であり、たとえ金持ちでも明らかに社会的に劣等な存在とみなし続けていたことに留意が必要である。<sup>31)</sup>

### III ネイサン・M・ロスチャイルドの発想と行動

#### 1. ゲットーからイギリスへの移住

ネイサン・M・ロスチャイルド（Nathan Mayer Rothschild）は1777年フランクフルトの「ユダヤ人街」（Judengasse）（いわゆるゲットー）で生れている。父親のマイヤー・アムシェルは、古銭を扱いながらヘッセン＝カッセル伯爵であるハナウ公ヴィルヘルム（後のヴィルヘルム9世）に食い込み、徐々に取引を増やしていった。ヴィルヘルム9世は領地内の男子を徴発して鍛え、主にイギリスに傭兵として売りつけた。イギリスはドイツ傭兵を植民地の治安維持に、さらにアメリカ独立戦争時にはアメリカに送り込んだ。犠牲者が出た場合は、追加の補償金をもらった。ヴィルヘルム9世は、こうして蓄えた豊富な資金を貸し付けによってさらに増やした。そして彼の資金の多くはイギリスに投資された。1794年ヴィルヘルム9世はイギリスにある資金を引当てに15万フロリンという多額の借入れをなじみの金融業者に打診したが、拒否された。これにロスチャイルドを含む3人が応じた。これがロスチャイルドが君主のために高額の資金を調達する「宮廷ユダヤ人」（Hoffaktor）となっていく第1歩であった。<sup>32)</sup> ちなみに、Rothschild（ドイツ



語読みロートシルト)は、「赤い楯」を意味するが、姓を持つことが許されなかったユダヤ人が家にかかげた目印を屋号のように使ったのがその由来である。<sup>33)</sup>

マイヤー・アムシェルは、商人サロモン・バルーク・シュナッパのむすめで17歳のゲートレと結婚、19人の子供を儲けたが、そのうち男5人、女5人が生き残った。1792年の時点でジャネット(21歳)アムシェル(19歳)サロモン(18歳)ネイサン(15歳)イザベラ(11歳)バベット(8歳)カール(4歳)ジュリー(2歳)ヘンリエット(1歳)ヤコブ(後のジェームズ)(0歳)となっており、フランクフルトに残ったアムシェル、ウィーンに送られたサロモン、ロンドンのネイサン、ナポリのカール、パリのジェームズは、後に「ロスチャイルド5人衆」と呼ばれるようになる。<sup>34)</sup> 3男のネイサンは、赤ら顔で太っちょで活力に満ち、短気で癪癪持ちであった。しかし、兄弟の中で一番創造的な頭を持ち、商才に恵まれていた。<sup>35)</sup> 1798年ネイサンは、英語がまったくできないのにイギリスに向けてフランクフルトを飛び出し、しばらくロンドンに滞在した後、マンチェスターに移動した。彼が持参した資金は20,000ポンドでそのうち16,000ポンドは、後に岳父となるレヴィ・バレント・コーエンを通じて父親が送ったものであった。<sup>36)</sup>

## 2. マンチェスターでの活動

ネイサンのマンチェスターにおける仕事は、大陸への布地の輸出であり、義理の兄であるベネディクト・ヴォルムスが輸入元になってくれた。彼らは、イギリスの商業的重要性とユダヤ人に対するイギリスの寛容さにひかれたのである。<sup>37)</sup> ネイサンの商売のやり方は、現金で安く仕入れ、かつ売値も低く押えて市場に食い込む方法であった。当時、マンチェスターでは繊維産業の粗利率(profit margin)は20%程度であったが、ネイサンはイギリス国内の取引では5%に押え、大陸向け商品の取引でも9%に押えた。ネイサンの儲けの元は主に3つで、①原綿を紡績屋に、②染料を棕染屋に、③完成品を大陸の顧客に売ることによって実現された。ネイサンは自ら「私は即決の男」(I am an off-hand man)と豪語し、周囲からも「即決払い」(prompt payment)の商人として有名になった。<sup>38)</sup>

ナポレオンが1795年にオランダに侵攻し、1806年には支配下においたが、この間アムステルダム証券取引所が閉鎖され、フランス国境は海外貿易に対して閉ざされようとした。この事態を打開するため、ネイサンは大陸側の協力者の力も得て、抜け道をさがし、安全な船を選んだ。ネイサンはこの過程で情報網を構築できたのである。<sup>39)</sup>

ナポレオンは、1805年のトラファルガー海戦の敗北の復讐のため1806年「大陸封鎖令」(Continental Blockade)を出し、イギリスも1807年、これに対抗措置(Orders in Council)を講じたため、イギリスと大陸の貿易は「公式」には閉ざされた。しかし、ネイサンは、兄弟間の緊密な連係とすでに築き上げた情報網を駆使して「密輸」に乗り出し成功を収めている。<sup>40)</sup> ちょうどこの時期、1806年10月ネイサンは結婚した。相手はロンドンの有力商人リーヴァイ・ベアレント・コーエン(Levi Barent Cohen)の娘ハンナ(Hannah)であった。N・ファーガソンは、「彼女は£3,248の持参金を持って輿入れした。ネイサンの密輸は1806年10月に始まり、1807年には、主にコーエンと組んで密輸ビジネスを展開した」としているが、これに対してH・カプランは、ロスチャイルド家の資料庫の記録をじかに細かく調査することによって、「そもそも£3,248は持

参金 (dowry) ではなくて、3 部からなる捺印証書 (indenture) で生活扶助料受領権 (settlement) であり、一種の「信託」である」としている。(金額も £3,248.14.06 と細かく記している) また、「1807 年の秋、ネイサンとソロモン・コーエン (ネイサンの義兄弟) は Ewart, Rutson & Co, Humble & Holland & Co., William Fawcett と組んで、中立国であるアメリカの船 “Laura” を使って、西インド諸島のコーヒーと砂糖をゴータンブルグ経由でアムステルダムに密輸した」ことを紹介している。<sup>41)</sup> 貿易取引が増えると必然的にその決済に為替手形 (bill of exchange) が使われることが多くなるが、ネイサンが次に目をつけたのがこうした手形の割引である。イギリスの普通の銀行は大陸の手形の割引に 1.5%～2% の手数料を取ったが、ネイサンは 1% のみ取ることと取扱い金額を増やしていった。この頃からネイサンは織物商から金融業者への転身を考えていたとみられる。<sup>42)</sup>

ネイサンが金融業者に完全に転身し、それを実現するためにはロンドンへの移住が必要だと判断させる 1 つの重要な切っ掛けが、ヘッセン＝カッセル伯の資金運用である。従来より父親のマイヤー・アムシェルが、ヘッセン＝カッセル伯の財務担当官 (Finanzbeamte) であったブデルス (Karl Friedrich Buderus) を懐柔して伯爵のイギリスにある資産をネイサンに運用させるよう説得していたことが功を奏した。D・ウィルソンは、「ネイサンは 1808 年に 3% の国債 (consols) を 15 万ポンド伯爵の代理で購入、1809 年末には 2 回目の 15 万ポンド、3 回目には手数料を ¼% 引きで 15 万ポンド購入している。これによってネイサンは 1808 年ヘッセン＝カッセルの宮廷仲介人 (investment broker) になった。それと同時に、ロンドンの 12 Great St Helen's Street に N.M.Rothschild and Brothers の名称で事務所を開設した」としている。<sup>43)</sup>

これに対して、N. ファーガソンは「ネイサンは、『ヘッセン＝カッセル公が父に £600,000 与えて、それが自分のところに郵便で送られて来た。私はそれをしかるべく運用したので、公からワインとリンネル製品を贈られた』と述べているが、実は 1807 年初めにネイサンはウィリアム (ヴィルヘルム) 9 世の在ロンドン特命全権公使ロレンツに資産運用を申し出たが拒絶されている。2 年後にやっとブデルスの働きかけのお陰で、マイヤー・アムシェルは 3% 国債 15 万ポンド分を 73.5 (額面 100 の 73.5% の意味) で買うよう指示された。こうした購入は 1813 年末までに 9 回行われ、購入総額は £664,850 になった。これがネイサンが後に、Sir Thomas Fowell Barton との会話の中で言及したことである。ネイサンの弟カールが 1814 年にこのことをほめかして『あの老人—ウィリアム—がわれわれの財産を作った。もしネイサンが選帝侯の 30 万ポンド (原文のまま) を手にしていなかったら、ネイサンはどこのだれともわからない存在になっていただろう』“the Old Man” -meaning William-had “made our fortune. If Nathan had not had the Elector's £300,000 [sic] in hand he would have got nowhere.” と述べている。そして「いずれにせよ £600,000 の国債購入と £100,000 以上の現物の所有はロンドンのシティに新らしい金融勢力の出現を告げるものだった」としている。<sup>44)</sup>

N. ファーガソンに対して、H. カプランは、ロスチャイルド家の資料庫 (Rothschild Archive) の資料を精査して、「残された記録を精査してみると、そもそも選帝侯の重要さは誇張されたものだ」と言う。また「あの老人がわれわれの財産を作った云々のくだりは誤解を招くもので、実際の手紙 (1814 年 9 月 9 日カールからアムシェルに宛てたもの) では、“the old man” の

部分は手紙の中頃に、“made our fortune”の部分は手紙の最後にある。つまり N. ファーガソンはこの2つをわざとくっ付けた」と言う。さらに「この手紙の後半の語り手はカールではなくネイサンであり、カールはネイサンがカールに書いてきたことを単に復唱しただけ」だと主張する。また、「選帝侯がロスチャイルド一家に富をもたらした根拠としてファーガソンが取り上げているのが、1814年4月のアムシェルの手紙であるが、そこでアムシェルが実際に述べているのは『ブデレスがここに来て、私に言ったのは—あなたはあの老人のおかげで財産を作った。彼を窮地に立たせることはしないでくれ—“Buderus has been here. He said to me, “You have made your fortune out of the old man. Don’t leave him in the lurch”』であり、これでは根拠にはならない」と主張する。さらに、H. カプランは、「現存する資料を見る限り、ネイサンと父親が選帝侯から£450,000～£550,000（£600,000とする説もある）の資金を受け取ったとする証拠の記録は見当たらないし、ネイサンもしくは父親が選帝侯のためにそれだけの国債を買ったとする証拠も見当たらない」として、「選帝侯がロスチャイルド家の財産を築かせたとする一連の説や主張はすべて推測の域を出ない」と結論づけている。<sup>45)</sup> たしかに、H. カプランが明確な記録がない限り、あることを主張する根拠とはなりえないとする「科学者的」態度は尊重すべきであるが、N. ファーガソンが言うように、ネイサンは相場を巧みに読んでキャピタルゲインや外国為替益を稼いだが、大量の国債を売却するに当って、バックに選帝侯がいることを臭わすことで信用力を高められたことは十分考えられる。<sup>46)</sup> また、H. カプラン自身も認めているようにネイサンはマンチェスター時代から、いいかげんな帳簿のつけ方をすることで悪名が高かった。このことを考慮に入れると、ネイサンの「取引記録」がないというだけで思考停止してしまうのは残念としか言いようがない。<sup>47)</sup>

### 3. ナポレオン戦争

ネイサンは1809年の5月～6月頃にロンドンのNo. 2 New Court St Swithin’s Lane に新しいオフィスを構え、引越したとみられる。しかし、マンチェスターでの事業を最終的に閉じるのは、1811年7月4日である。<sup>48)</sup> ネイサンはロンドンに腰を据えて本格的に金融ビジネスを遂行し、大成功を収めたが、それを可能にした1つの要因がナポレオン戦争である。イギリスはナポレオンが権力を握り、周囲の国々に侵攻を開始した1799年からワテルローの戦いで敗れ、セントヘレナ島に流される1815年まで、一貫してナポレオンと対峙し続けた。しかし、そのための軍事費（ナポレオン登場以前の反革命勢力への支援を含む）は膨大で総額£830百万（内£59百万は同盟国への支援金）に上る。そのためイギリスの国の借金も1793年の£240百万から1815年には、£900百万にまで増大した。（これは国民総所得の200%に当たる）これらの大部分はConsolsをはじめとする国債発行で調達された。<sup>49)</sup> ネイサンは、大陸にいる兄弟たちと緊密に連絡をとりながら、イギリスの軍事費用調達とその搬送や支払いに深く関与し、同時に、扱う国債や金貨・金塊などの相場で巧妙かつ大胆な投機を行うことで財をなしたのである。なお、ネイサンの成功に大きく関わった人物が1811年にイギリスの兵站部将校（Commissary in Chief）になったヘリーズ（John Charles Herries）である。ヘリーズは、当時イベリア半島でフランス軍と戦っていたウェリントン（Arthur Wellesley, the 1<sup>st</sup> Duke of Wellington）に現地で必要な資金を供給す



ることで悩んでいた。ヘリーズから打診を受けた金融業者が金貨や金塊をピレネー山脈を越えて運ぶリスクに尻込みする中、ネイサンはこれを敢然と引受け、成功させたのである。N. ファーガソンは「証拠は乏しいが信じられない話ではない」として、「ネイサンがロンドンで金塊を買い、それを大陸で待つジェームズに密輸して渡し、ジェームズは金塊をスペイン、ポルトガルの金融業者宛為替手形に変え、それをピレネー山脈を越えてウェリントンに届けた」と述べている。<sup>50)</sup>

1814年1月には、南フランスに侵攻したウェリントンに£600,000相当のフランスの金貨・銀貨を運んでいる。これらはネイサンと兄弟たちがドイツ、フランス、オランダで集めたものであり、成功報酬は届いた金額の2%であった。これよりさらに重要であったのが、大陸の同盟国への支援金の送金であった。これは、1813年の協定に基づいて行われたが、中でも成功を収めたのが、ロシアへの支援である。ネイサンは、Hope & Co. が取引に躊躇しているのを見て、すかさず行動し、ロシア側の窓口である外交官の Gervais に1%の賄賂 (der Freund Schmiergeld) を払うことで取り入り、£1,333,333の送金を完遂した。これによってネイサンと兄弟は、イギリスから2%の手数料と2%の実費負担、ロシアから4%の手数料を受け取っている。この取引はネイサンにとって「名人の仕事」(Meistergeschäft) となった。<sup>51)</sup>

しかし、ネイサンとナポレオン戦争と言えば、やはりワーテルローの戦いにまつわる数々の「伝説」や「神話」であろう。人口に膾炙しているところでは、ネイサンは、イギリス軍の勝利を誰よりも早く知り、まず敗けたと偽情報を流し、国債が暴落した所で買い上り100万ポンド以上の大儲けしたというのがある。これに対して D. ウィルソンは、儲けは「何万ではあったが決して何百万、何千万ではなかった」として「神話」を否定している。さらに N. ファーガソンは、「国債の売買での儲けは、ただか£10,000程度で、実際には、ネイサンと兄弟は危うく破産するところだった」と言う。その理由は「ナポレオンが1815年3月1日エルバ島を脱出して権力を回復するやいなや、ネイサンは再びナポレオンとの長期間の戦争が不可避とみて、大陸の同盟国への資金送金ニーズを見越し、ロンドンで大量の金塊を買いウェリントンに送るべくヘリーズに売ったのである。この時ヘリーズの勘定残高は£9,789,778に上っていたという。ネイサンはこれで£390,000の手数料を稼ぐ皮算用をしていた。ところが、実際には6月18日にワーテルローで勝負はついてしまった。これによって高騰すると踏んでいた金価格は逆に暴落し、さらにイギリス国債を新たに100万ポンド引受けていたから、これらを捌くのに相当の損失を出した」からだと言う。N. ファーガソンはさらに続けて「ネイサンは、この損失を取り返すべく勝負に出た。彼は国債を大量に買ったのである。(7月20日付のロンドン“Courier”はネイサンの大量買いを伝えている)たとえば、Omnium (イギリス国債の1種)を£450,000、Consols (年利3%の永久債)を£650,000購入し、1817年にかけて売却した。これによる儲けは£250,000であり、1815年の損失を十分取り返した」としている。これについて兄弟の1人サロモンは「ネイサンはもう1つの「名人芸」(masterwork)をやったのけた」と評している。ネイサンは、なぜこれほどの儲けを手にすることができたのかという疑問に、N. ファーガソンは、「ネイサンはイギリスの財政・金融政策の内部情報を得ていたから」と結論づけている。<sup>52)</sup>

これに対して、H. カプランは、例によってロスチャイルドの資料庫を精査した結果「現存する資料を見る限り、ナポレオンとワーテルローに関する言及はほとんどない (only rare

mentions)。ネイサンと関係が深かったヘリーズの手紙や書類にもワートルローに関する記録は残っていない。ウェリントンのワートルローの勝利でネイサンが豊かになったとする証拠もまったくない。また、ワートルローのお陰で多額の損失を出した証拠もない。さらに、ネイサンが当該期間に国債市場で多額の取引をした証拠もないし国債取引で大儲けした証拠もない」と素っ気ない。<sup>53)</sup>

#### 4. 世界 No. 1 のマーチャント・バンカー

ナポレオン戦争が終わり、平和が到来すると、ネイサンとロスチャイルド兄弟を取り巻く環境は大きく変化した。とくに大陸では、ロスチャイルドのライバルであるベアリング (Baring Brothers Co.) やホープ (Hope & Co.) に起債事業を奪われるようになった。その最たるものが、ナポレオン戦争で敗れたフランスの 700 百万フランの賠償金支払いのための借款をベアリングが仕切ったことである。このベアリングの成功を受けてリシュリュー公爵は「ヨーロッパには 6 つの強国がある。イギリス、フランス、プロシア、オーストリア、ロシアそしてベアリング・ブラザーズだ」と言ったと伝えられている。<sup>54)</sup> この出来事によって、ネイサンは、戦争中成功したことが平時にはうまく行かないことを悟ったのである。ネイサンは将来、ロスチャイルドがライバルに勝ち、生き残るためには、自分にはあまり馴染みのない国際金融の分野に積極的に進出して行くことを決断したのである。こうして 1818 年、ロスチャイルドは外国政府債発行市場に本格的に参入した。その内容はプロシア政府の総額 £500 万の起債であり、ロスチャイルドは、全額の引受けを独占した。この債券の特徴は、ターラーではなくポンド建てであったこと、利息の支払い場所がベルリンではなくロンドンであったこと、また償還を確実にするためにイギリス式の「減債基金」(sinking fund) を付けたこと、さらにロンドンで発行された外国政府債でイギリス政府の保証が付かない最初の起債であったことなどである。<sup>55)</sup> N. ファーガソンによれば、このプロシア向け国債の発行は、ヨーロッパの資本市場にとって 1 つの転機となった。具体的には、上記のような発行条件を付けることで外国政府債のイギリス化 (Anglicisation) が一気に進み、その頃資産を蓄積したイギリス人の外国債投資に道を開き、ロンドンが国際金融市場へと成長する切っ掛けとなった。こうして、ネイサンは、外国債発行のモデルを確立したが、この方式はすぐに「標準」(standard) となっていった。ちなみに、当時 The Times 紙はネイサンを「イギリスへ最初に外国債を紹介した人物」と表している。<sup>56)</sup> この結果、1818 年～1832 年でネイサンはロンドンで調印された外国政府債 26 本 (総額 £37.6 百万) のうち 7 本 (総額の約 38%) を取り扱った。また、別の統計によれば、1815 年～1859 年にロンドン・ロスチャイルドは 50 本の外国政府債の発行 (総額約 £250 百万) を手掛けたのに対して、ベアリング・ブラザーズは 14 本 (総額 £66 百万) にとどまり、ロスチャイルドがライバルを圧倒していることがわかる。こうした状況を受けて、フランスのジャーナリスト アレクサンドル・ヴェイユ (Alexandre Weill) は「ロスチャイルドは証券取引所そしてすべての内閣の上に君臨しかつ統治している」と述べている。N. ファーガソンは、リシュリューの言い方を真似て、「もし 1820 年代に 6 番目の強国があったとすれば、それはもはやベアリングではなく、ロスチャイルドであった」と結論づけている。<sup>57)</sup>

1825 年には金融危機が起きた。これは、1822 年～24 年の主に南アメリカへの投機が破綻した

ことに起因するもので、770 あった銀行の内 73 が破産した。イングランド銀行は流動性不足に陥り、イギリスは瀕死の状態に追い込まれた。この窮地を救ったのがネイサンである。ネイサンは急を聞いてただちに手持ちの £300,000 相当のソブリン金貨 (sovereign) をイングランド銀行に提供し、足りない分を主にパリのジェームズから供給を受け、危機を脱するまで次々と供給し続けた。最終的にこの作業にかかった金額は £10 百万に達した。しかし、ネイサンは寛大な手数料しか請求しなかった。もちろん、ネイサンは慈善事業や愛国心でこの仕事をやったわけではなかった。彼にはこれを機にロンドン金市場で支配的地位を獲得したいと考えており、その目的を達成した。<sup>58)</sup>

#### IV ネイサン・M・ロスチャイルド成功の要因

##### 1. 商業と金融の天才

ネイサンの成功の要因は、やはり彼がビジネスの天才であったことにある。ネイサンの天才ぶりを示すエピソードには事欠かない。たとえば、ネイサンは金融市場に関して「鼻がきく」(a nose)と言われた。具体的には、証券取引所で取引される国債のすべての値を覚えることができ、それらがどちらに動くか「本能的に」(instinctively) 知っていたと言われている。また、ネイサンは複雑な金融の計算を素早くやってのけ、そしてこれらの計算をたやすく記憶することができたとも言われている。さらに、彼は行ったすべての取引を思い出すことができたとされている。<sup>59)</sup> こうした鋭い直感力を持っていたネイサンは、利益の追求の仕方も独特で、債券市場では、儲けは確実であるが地味な起債・引受けではなく既発債への投機を繰り返した。また、マーチャント・バンカーの本来の仕事である為替手形の引受けについては、他業者の半分の手数料で行う一方、ヨーロッパ市場間の為替レート差に着目した裁定取引 (arbitrage) で稼いだのである。<sup>60)</sup>

これに関して、メッテルニヒの秘書で右腕であったゲンツ (Friedrich von Gentz) は、「ネイサン (とその兄弟) はつねに正しい方を選ぶ驚くべき本能 (instinct) を持っている」と述べている。<sup>61)</sup> また、駐英プロシア大使であったフンボルト (Wilhelm von Humboldt) は、「ネイサンはまったく粗野で無教養であるが、非常に聡明で、お金については疑いのない天才だ」と述べている。<sup>62)</sup> さらに、D. キナストン (David Kynaston) は「ネイサンは、ロンドンのシティの歴史において、おそらく最も重要な人物であり、とくに外国為替取引においては「究極の師匠」(consummate master) と呼ぶべき傑物であった」と述べている。<sup>63)</sup>

##### 2. 強いリーダーシップと兄弟の団結

ロスチャイルド一家は、ユダヤ社会の伝統的な家族観、つまり父親を頂点とする家父長的な家族を理想としていた。すでに述べたように、父親のマイヤー・アムシェルには 5 男 5 女がいたが、1796 年マイヤー・アムシェルは息子のうち年長の 2 人を共同経営者にすると同時に、娘たちや娘婿たち、さらに、従兄弟や甥など男の親戚は経営に参加させない旨言い渡した。これは経営のような一家の消長にかかわる重大事は、家長と実の息子たちという完璧に信頼できるものだけで行ふべきとの信念があったからである。<sup>64)</sup> 1812 年 9 月 19 日マイヤー・アムシェルは死去した。

その臨終の間際に子供たちに遺言を残したが、その中でも娘や娘婿が M.A.Rothschild & Sons の事業に参加することを禁じ、帳簿や書類に触れることさえ禁じたとされている。それと同時に、5 人の息子たちには、互いに愛と友情をもって交わり、遺言の意向に忠実に従うよう命じたとされている。つまり、兄弟同士の結束を強調したのである。<sup>65)</sup> ロスチャイルド兄弟の団結力はさまざまな取引で発揮された。たとえば、大陸封鎖令をかいくぐってネイサンが密輸した品物を大陸でアムシェルとサロモンが売り捌いたり、ウェリントンへの金貨の運送は、ネイサンとジェームズの連係で完遂した。また、ワーテルローのための資金調達では、カールがアムステルダムで国債の販売に奔走したりしている。<sup>66)</sup>

こうしたロスチャイルド兄弟の団結は、1818 年のパートナーシップ協定にも表われている。それによれば、兄弟のパートナーシップの形態は 5 人のパートナーの共同責任 (mutual responsibility) に基づく 3 つ (フランクフルト、ロンドン、パリ) の共同商事会社 (joint mercantile establishments) で、しかも、1 つの包括的な合同会社 (one general joint concern) を形成するとされている。<sup>67)</sup> また、メッテルニヒの尽力で 1822 年 9 月 29 日、オーストリア政府から 5 兄弟とその男の子孫に男爵位が授けられたが、賜った楯型紋章には「協調」(Concordia)、誠実 (Integritas)、勤勉 (Industria) と刻まれ、5 本の矢 (5 兄弟の象徴) も描かれていたことからわかる。さらに、ゲンツ (Friedrich von Gentz) も「兄弟は父親の臨終の言葉を守り、すべての取引において破れない団結と協力を維持した」と言っている。<sup>68)</sup> また、兄弟の団結の強さは「同族結婚」(endogamy) の多さにも表われている。マイヤー・アムシェルの孫の代には 14 の結婚のうち一族以外との結婚は 4 つだけであった。<sup>69)</sup>

ネイサンは、こうした兄弟の団結力をフル活用して、事業に取組んだのである。そこには兄弟たちを有無を言わず巻き込んで事業を拡大したネイサンの強いリーダーシップが存在したのである。ネイサンは、あっと言わせるような冒険を次々にやってのけ、たった 5 年で一家の事業のスケールを劇的なまでに変えたのである。<sup>70)</sup>

### 3. 最高司令官

ネイサンが兄弟間で強いリーダーシップを発揮できたのは、ネイサン自身の能力の高さと気性の激しさが原因となっている部分が大いだが、同時に他の兄弟にも原因があったようである。長男のアムシェルは、「ゲットーの息子」で敬虔なユダヤ教徒であり、保守的で、商売の才能と独立心はなかった。また、5 人の中でもっとも用心深く、静かな生活にあこがれていたと言われている。次男のサロモンは、一家の外交官的存在で、陽気でやさしく、へりくだることを知っており、君主や宮廷人の最良をえることができたし、兄弟たちともうまくやれたが、あまりに気がいい性分だったと言われている。三男のネイサンは、才気煥発、活力に満ち、短気で癪癪持ち、しかし、兄弟で一番商才に恵まれていた。四男のカールは、神経質で自分に自信がなく、ネイサンの才能にあこがれ、偶像化し、一方で恐れていた。ナポリに派遣されたが、外国生活になじめなかったとされる。「自分はビジネスは嫌いで、生るのに必要な衣類とパンさえあればよい」と言ったと伝えられる。五男のジェームズはネイサンに匹敵する才能の持ち主で、商売のセンスも抜群であった。ものごとを素早く学びとり、独立心も旺盛で、早くから海外に飛躍することを夢見

て、パリを永住の地とした。こうして見るとネイサンとジェームズ以外は、ビジネスに関しては凡庸であったことがわかる。ジェームズはネイサンより 11 歳若かったこともあり、ネイサンが自然とリーダーシップをとるようになったのである。<sup>71)</sup>

しかし、ネイサンが才気にまかせて突っ走り、他の兄弟が付いていけず、もたつくと攻撃的になった。1811 年には父親の存命中にもかかわらず、威張り散らすようになり、ますます専制的になった。そして 1814 年には兄弟仲に亀裂が入る寸前まで事態は深刻化した。この時ネイサンはアムシェル、サロモン、カールの仕事振りに激怒し、「白痴のように」(idiotically) や「白痴的行動」(idiocies) といった屈辱的な言葉を使って人格攻撃とともれる手紙を送りつけたのである。これによって、気の弱いカールは、取り乱し床に臥せてしまった。またサロモンも背中と脚に激しい痛みを覚えるようになった。これを見かねたネイサンの義弟マイヤー・ディヴィッドソン (Mayer Davidson) (ネイサンの妻 Hannah の妹 Jessy Barent Cohen と結婚) は、ネイサンに「このような屈辱的で、破壊的かつ嘆かわしい態度をとることは、ロスチャイルド一家の将来の団結を危険にさらす」と諫める手紙を出したが、ネイサンには効き目はなかった。こうした抗議を受けても、ネイサンは「それなら事業を解体する」と威した。<sup>72)</sup> 結局、サロモンはネイサンに屈服した。1814 年 8 月には「私のロンドンの弟は「最高司令官」(the commanding general) であり、私は彼の部下の元帥 (field marshal) です」と述べている。またカールもネイサンの優位性を受け入れた。なぜなら、どんなに喧嘩をしても兄弟より信頼できる者は他にいないことをお互いにわかっていたからである。また、自分たちの繁栄のすべてがネイサンのエネルギーと眼力の賜物であることを承知していたからである。こうしたことは、次に示す兄弟間の資本金の配分によく表われている。<sup>73)</sup>

兄弟間の資本金配分

	1818 (年)	1825 (年)	1828 (年)
Amschel	7,776,000	18,943,750	19,693,750
Salomon	7,776,000	18,943,750	19,693,750
Nathan	12,000,000	26,875,000	28,200,000
Carl	7,488,000	18,643,750	19,393,750
James	7,488,000	18,643,750	19,393,750

(単位：フランス・フラン)

#### 4. 情報網と人間関係の構築

ネイサンは、早くから情報の重要性に気付き、情報網の構築と維持に多大の時間とエネルギーと資金を投入したことで知られている。ナポレオン戦争時代にはドーバー (Dover) とカレー (Calais) に代理人 (agent) を置き、彼らを意のままに動かして、たとえば、船長に上乗せ料金を払って至急便で手紙を運ばせたりしている。さらに、国債を中心とした債券市場での売買や市場間の金利差や為替レート差を利用した裁定取引を始めると、金利や為替レートに影響を与える各国の経済や財政状態や経済・金融政策担当官僚や閣僚の動向を探るべく、主立った金融市場には、常勤の (salaried) 代理人を置いた。こうしてネイサンは、ネイサンと代理人たち、また代理人同



士の間で素早く情報を交換する特別なシステム (Courier Service) を作り上げた。1835 年頃には、ロスチャイルドの「通信サービス」は当時のいかなる通信手段よりすぐれているとの評判を得た。こうしたことから、1830 年代には、政治家や外交官がロスチャイルドの通信ネットワークを使うようになった。なぜなら、ロスチャイルドのものは、公的な通信手段より断然速かったからである。ロスチャイルドの通信ネットワークを使った超大物が、ナポレオン戦争や戦後のヨーロッパ政治を仕切ったメッテルニヒである。メッテルニヒは、ロスチャイルドという非公式なルートを使って、他の政府に彼の見解を伝えたと言われている。ネイサンは、これら重要な外交上の情報を得られたため、投資の判断において有利な立場に立つことができたのである。<sup>74)</sup>

もう 1 つネイサンが重視したのが、イギリスや当時の有力国 (フランス、オーストリア、プロシア、ロシア) の政策に影響力ないし決定力を持つキー・パーソンとの人的関係の構築である。古くは、父親から引継いだ選帝侯の財務顧問カール・ブデルスやナポレオンによって結成されたライン同盟の首座大司教侯 (Fürstprimas) になるダルベルク (Karl Theodor Anton von Dalberg) と親交を結び、1813 年以降では、イギリスの兵站部将校ヘリーズやイギリスのウィーン会議代表を務めた外相のカッスルレー卿 (Lord Castlereagh) の兄弟であるチャールズ・スチュワート (Charles Stewart) と親しく交わった。1820 年代では、首相のリバプール卿 (Lord Liverpool) や大蔵大臣のバニシタート (Nicholas Vanisittart) と直接話すようになった。1830 年代では、ウェリントン公爵 (Duke of Wellington) に、選挙法改正にまつわる混乱期 (Reform crisis of 1830 ~ 32) に重要な財務上のアドバイスをしている。外国では、オーストリアのメッテルニヒの秘書ゲンツやプロシアの国家顧問官 Jordan、ロシアの外交官 Gervais などに賄賂を惜しみなく使って籠絡した。さらに、メッテルニヒが長年の政治生活で金欠であるとの情報をえたネイサンと兄弟は、メッテルニヒに 900,000 グルデンの融資を行った。この融資が行われた 6 日後、ロスチャイルド 5 兄弟は男爵に叙せられている。さらに、ネイサンはイギリス国王ジョージ 4 世に融資したことが切っ掛けでイギリス王室との関係も構築したのである。<sup>75)</sup>

## V おわりに

ネイサン M. ロスチャイルドはビジネスで成功し、一代で巨万の富を築いたが、ここに 1 つの疑問が残る。それは、なぜネイサンは金儲けに邁進しつづけたのか、さらに、ネイサンは築いた富で何がしたかったのか、である。一つの見方は、ネイサンが根っからの金の亡者つまり「マモン」(Mammon = 強欲の化身) であったとするものである。もう一つの見方は、D. ウィルソンの言う「民族に対する責任感」である。ネイサンが金儲けに熱中したのは、ユダヤ人を真に解放するには政治を動かすしかないし、政治家を動かすためには、公職から排除されていたユダヤ人にとっては、金の力しかないと考えたとしても不思議ではない。<sup>76)</sup>

いずれにせよ、ネイサンが金に対する強い執着心を持ちつづけたのは何かに突き動かされていたからであろう。その何かとは、「ルサンチマン」(Ressentiment) であったと考えられる。ただし、ここで言う「ルサンチマン」は、ニーチェが『道徳の系譜学』で述べている「あるものに本当の意味で・・・反応することができないために想像だけの復讐によって (nur durch eine imaginäre

Rache) その埋め合せをする」ような怨念、ないしは「無力な者の内にこもったような憎悪と復讐の念」ではなく、もっと積極的に反ユダヤ主義者やそれを黙認する社会に対して「復讐する」(avenge) 気持ちのことである。<sup>77)</sup> 確かにイギリスは大陸に比べてユダヤ人差別は穏やかではあったが、その差別はより陰険 (more insidious) なものであった。ネイサンに対しても差別的な、さらに見るに耐えないような侮辱的な風刺画も数多く出回っていた。ネイサンの「ルサンチマン」は、こうした状況への反発から生じたと言えよう。<sup>78)</sup>

## 注

- 1) 田中文憲 (2016)：イギリスの興隆と衰退に関する一考察 (1) ～イギリス興隆の要因～奈良大学紀要、44：5
- 2) Walter Bagehot (2005)：Lombard Street.A Description of the Money Market.The Echo Library.Cirencester.4  
バジョット (2010)：ロンバード街～ロンドンの金融市場～ (宇野弘蔵訳) 岩波文庫、15
- 3) 佐藤唯行 (1995)：英国ユダヤ人 講談社、20～38  
Elizabeth Pearl (1990)：Anglia Judaica or A History of the Jews in England.George Weidenfeld and Nicolson Ltd. London.3～7
- 4) 聖書 (新共同訳) (1989). 日本聖書協会、(旧) 317
- 5) 同上、(旧) 131
- 6) 同上、(旧) 204
- 7) ヴェルナー・ゾンバルト (2016)：ブルジョワ～近代経済人の精神史 (金森誠也訳) 講談社、398～399
- 8) 佐藤唯行：前掲書、53～54
- 9) 同上、38～39 69～71
- 10) 同上、63～64
- 11) 同上、64
- 12) 同上、73
- 13) 同上、72 46～47
- 14) 同上、80 Elizabeth Pearl：op.cit.109～112
- 15) 佐藤唯行：前掲書、89～92
- 16) 同上、108～111
- 17) 同上、108～111
- 18) 同上、112
- 19) 同上、121～122
- 20) 長谷川如是閑 (1967)：イギリス的な考え方 (関嘉彦との対談) 世界の名著第38巻付録. 中央公論社  
この対談の中で長谷川如是閑は utilitarianism は「功利主義」ではなく「実益主義」と訳すべきとしている。
- 21) 佐藤唯行：前掲書、122
- 22) 同上、122  
渡辺善之：解説【ウィリアム・シェークスピア (1985)：ヴェニスの商人 (小田島雄志訳) 白水社 所収】  
182～183 渡辺は、1594年エリザベス女王の侍医であったロデリーゴ・ロペスが女王暗殺を企てたとして処刑されたがロペスがポルトガル系ユダヤ人であったため、反ユダヤ感情がロンドンで再燃した。これを受けて、マーロウの『マルタ島のユダヤ人』が海軍大臣一座によって15回公演された。おそらくシェークスピアはこの事件とマーロウの芝居に刺激を受けて、自分の劇団のためにユダヤ人を扱った芝居を書いたのではないかとしている。
- 23) 佐藤唯行：前掲書、124～126

ヨハネ黙示録：聖書（前掲書）第 20 巻に「1 人の天使が年を経たあの蛇、つまり竜を取り押え、千年の間縛っておき・・・千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。・・・イエスの証と神の言葉のために、首をはねられた者たちの魂を見た。・・・彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。」との記述がある。

- 24) 佐藤唯行：前掲書、127
- 25) 同上、132、133 ～ 134
- 26) 同上、141
- 27) 同上、141 ～ 142
- 28) 同上、145 ～ 146
- 29) 同上、145
- 30) 同上、163
- 31) 同上、164 ～ 165
- 32) デリク・ウィルソン（1995）：ロスチャイルド～富と権力の物語（本橋たまき訳）（上）、新潮社、23 ～ 37  
 Derek Wilson（1994）：Rothschild ～ A Story of Wealth and Power、Andre Deutsch Ltd.London、7 ～ 15  
 Herbert H. Kaplan（2006）：Nathan Mayer Rothschild and the Creation of a Dynasty ～ The Critical Years 1806 ～ 1816. Stanford University Press. Stanford、3  
 フレデリック・モートン（1975）：ロスチャイルド王国（高原富保訳）新潮社 24 ～ 36  
 Frederic Morton（1961）：The Rothschilds ～ a Family portrait.Diversions Books .New York、21 ～ 29
- 33) フレデリック・モートン：前掲書、23
- 34) デリク・ウィルソン：前掲書、31、35 ～ 36
- 35) 同上、44
- 36) Richard Davis（1983）：The English Rothschilds. William Collins Sons and Co. Ltd.London、23
- 37) デリク・ウィルソン：前掲書、50
- 38) Bill Williams（1998）：Nathan Rothschild in Manchester. In Victor Gray and Melanie Aspey（eds）：The Life and Times of N M Rothschild 1777 ～ 1836. N M Rothschild & Sons、London、38  
 Niall Ferguson（1998）：The House of Rothschild ～ Money's Prophets 1798 ～ 1848 volume 1.Penguin Books、New York、53  
 Derek Wilson：op.cit.25
- 39) デリク・ウィルソン：前掲書、40、55
- 40) Herbert H. Kaplan：op.cit.11
- 41) Niall Ferguson：op.cit.59  
 Herbert H.Kaplan：op.cit.9 ～ 11
- 42) デリク・ウィルソン：前掲書、56
- 43) 同上、66、68 ～ 69  
 Derek Wilson：op.cit.38 ～ 39
- 44) Niall Ferguson：op.cit.66 ～ 67
- 45) Herbert H.Kaplan：op.cit.35 ～ 39
- 46) Niall Ferguson：op.cit.67
- 47) Herbert H.Kaplan：op.cit.4  
 Niall Ferguson：op.cit.50
- 48) Herbert H.Kaplan：op.cit.24  
 Bill Williams：op.cit.41 1811 年 7 月 4 日の Manchester Exchange Herald に広告を出している。
- 49) Niall Ferguson：op.cit.84
- 50) ibid. 87

- 51) *ibid.* 88 ～ 91
- 52) *ibid.* 96 ～ 118  
デレク・ウィルソン：前掲書、115
- 53) Herbert H.Kaplan：op.cit.146 ～ 147
- 54) *ibid.* 155  
田中文憲（2008）：ペアリングズの崩壊～マーチャント・バンキングの終焉～奈良大学紀要、36：3
- 55) Herbert H.Kaplan：op.cit.155  
入江節次郎（1985）：イギリス資本輸出史研究. 新評論 119 ～ 121
- 56) Niall Ferguson：op.cit.124 ～ 125
- 57) *ibid.* 162 ～ 163
- 58) *ibid.* 135 ～ 137 なお、ロスチャイルドの金市場の支配は、その後も続き、1919年には、ロスチャイルドを中心に、他の大手金取扱業者4社とロスチャイルド銀行内で1日に2回金の価格が決定され、これが世界の金価格の基準となる体制が構築された。
- 59) Derek Wilson：op.cit.39  
Niall Ferguson：op.cit.265
- 60) *ibid.* 67
- 61) Derek Wilson：op.cit.61
- 62) *ibid.* 67
- 63) David Kynaston：The City of London in Nathan Rothschild's time、In Victor Gray and Melanie Aspey（eds.）：op.cit.42、48
- 64) Derek Wilson：op.cit.18
- 65) *ibid.* 50 ～ 51
- 66) Frederic Morton：op.cit.44 ～ 47  
Derek Wilson：op.cit.44
- 67) Niall Ferguson：op.cit.110
- 68) Derek Wilson：op.cit.50 ～ 51
- 69) *ibid.* 81
- 70) *ibid.* 37
- 71) *ibid.* 19  
Niall Ferguson：op.cit.108
- 72) *ibid.* 105 ～ 106  
Herbert H.Kaplan：op.cit.114 ～ 116  
Victor Gray：An off-hand man：The character of Nathan Rothschild、In Victor Gray and Melanie Aspey（eds.）op.cit.21
- 73) Niall Ferguson：op.cit.107 ～ 109  
Derek Wilson：op.cit.72
- 74) *ibid.* 9 155 ～ 159  
Herbert H.Kaplan：op.cit.152 ～ 153
- 75) *ibid.* 9 155 ～ 159  
Herbert H.Kaplan：op.cit.152 ～ 153
- 76) Derek Wilson：op.cit.92
- 77) ニーチェ（2009）：道徳の系譜学（中山元訳）. 光文社 56 ～ 57、58  
Friedrich Nietzsche（2009）：Jenseits von Gut und Böse/Zur Genealogie der Moral、Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH&Co.München、270  
Frederic Morton：op.cit.64

78) Victor Gray : op.cit.19

### Summary

The purpose of this paper is to analyze the reasons why Nathan M.Rothschild, a Jew, was able to attain such great success in London and become the top financier in the world. The analysis shows that at the point in time when Nathan Rothschild arrived in London, the city had already been established as a center of commerce and finance due to the flourishing foreign trade between England and the colonies and the discounting business of bills of exchange. Moreover, in England, there was less discrimination and more tolerance toward Jews than on the Continent.

Nathan Rothschild, a genius of commerce and finance, started his business as a textile trader in Manchester and then moved to London in order to start the financing business which made him famous as the number one merchant banker in London and ultimately, made him a millionaire.

This study identified four reasons why Nathan Rothschild was so successful in business. First, he was a gifted speculator in the Consols market and had a nose for sniffing out the customers' needs. Second, Rothschild was able to build a tight information network among his father and five brothers and made it function strategically. Third, he was able to cozy up to the key persons in politics and utilize their power for his own purposes. Fourth, he was a man of leadership, mobilizing his family members as well as his collaborators as if he were a "commanding general."

In conclusion, Nathan M.Rothschild, a genius of commerce and finance, attained great success in London because that city provided him with ample business opportunities and had more tolerance toward Jews than the Continent.

**Keywords:** Napoleonic Wars, bill of exchange, merchant banker, information network, leadership